

Sawles Wardeの異写本パラレルテキスト研究：中間報告

田辺 春美

1 はじめに

13世紀英国の中西部で*Ancrene Wisse*という修道女の守るべき規則を教示する書物があらわされ、英語で書かれた9写本が現在まで伝わっている。Tokyo Medieval Manuscript Reading Group¹では、これらの中から重要な4写本を選び、特にCambridge, Corpus Christi College MS 402写本を中心として1行ごとにパラレルに並べた異写本パラレルテキストを完成させ、2003年と2005年に2巻本として出版した(Kubouchi and Ikegami, 2003, 2005)。それに引き続き、*Ancrene Wisse*と同じ言語でかかれていると考えられてきたKatherine Groupに属する一連の聖女伝—*St. Katherine*、*St. Margaret*、*St. Juliana*、*Hali Mei=had*—についても同様に、Oxford, Bodleian Library MS Bodley 34を中心とした3写本の異写本パラレルテキストを編集し、2011年に出版することができた(Ono and Scahill, 2011)。この*Ancrene Wisse*とKatherine Groupが書かれている言語は、それぞれA言語、B言語、また合わせてAB言語と呼ばれ、Tolkien (1929)は均質な方言であったと指摘した。これらの作品群の中で、通例Katherine Groupに入るとされているアレゴリカルなキリスト教説話の*Sawles Warde* (以下ではSWと省略)のみが未だパラレルテキストに編集されていないことから、AB言語の比較研究を進めるためにも、SWの異写本パラレルテキストの作成は急務である。幸い、成蹊大学の2012年度から2014年度の研究助成プロジェクトとして本研究が採択され、異写本パラレルテキスト研究遂行することができるようになった。初年度の2012年度の研究成果の中間報告を研究責任者として以下に述べたい²。

-
- 1 1980年代初期より久保内端郎東京大学名誉教授を代表として中世英語の写本を研究している。
 - 2 本研究の研究課題は、「英国初期中英語宗教散文*Sawles Warde*及びWooing Groupの異写本パラレルテキスト研究」(研究責任者：田辺春美)である。共同研

2 SWの写本

SWは以下の3写本に残されている。

Oxford, Bodleian Library MS Bodley 34, ff. 71v-80v (B)

London, British Library, Royal 17 A.xxvii. ff. 1r-10v (R)

London, British Library, Cotton Titus D.xviii. 105v-112v (T)

これらの写本の作成年代は、B写本とR写本が1225年、T写本は1250年頃と推定される (cf. *MED*)。B写本は、他のKatherine Groupの作品がすべて収録されていることや使用されている言語が*Ancrene Wisse*が書かれたA言語と類似していることなどから、3写本の中で最も重要とされる。ただし、B写本には欠落している部分があり、その部分は通例R写本 (ff. 10r3 – 10v23) から補完している。

3 SWの異写本パラレルテキストの編集方針とサンプル

1で既に述べたように、Katherine Groupの他の作品はすでに3写本がパラレルテキストに編集され、Ono and Scahill (2011) として刊行されていることから、SWの異写本パラレルテキストも同様な方針で編集を行う。すなわち、B写本をベースとして、他の2写本が対応するようにパラレルに行を並べる。また、出来る限り写本と同じ状態を再現すべく、文字だけでなく句読点も正確に記録し diplomatic なテキストになるよう編集する。その際には、オリジナルの写字生の書いたものを残すようにし、オリジナルの写字生以外の同時代の写字生や後の時代に写字生の書き残した文字や句読点は採用しないこととする。次に、SWパラレルテキストの冒頭2行をサンプルとして示す。

研究者は、John Scahill (Insearch 講師, Sydney)、小野祥子 (東京女子大学教授)、鳥崎里子 (昭和女子大学准教授) の3名である。この他に、Tokyo Medieval Manuscript Group のメンバーとして、池上恵子 (成城大学短期大学部名誉教授) と狩野晃一 (駒澤大学講師) も協力している。本報告書に述べられている研究結果は、上記の共同研究者と研究協力者すべての貢献により得られたものである。

B 72r03, R 1r04, T 105va05

B Ure lauerd i%þe godspel teacheðus þurh a%bisne . hu we

R \$V\$re lauerd i þe godspel tea/cheðus þurh a bisne . hu we

T \$V\$re lauerd i þe Godspel leareðus & / teacheðþurh a forbisne . hu we /

B 72r04, R 1r05, T 105va07

B ahen wearliche to biwiten us_seoluen wiðþe unwiht

R ahen wearliche . bi_witen / us_seoluen . wiðþe unwiht

T ahen warliche to wite7n us_seluen / wiðþe vnwiht³

このように3写本を平行に並べる試みは、中野 (1998) と狩野 (2006) にも見られるが、本研究では異なった編集方針を採用している。

4 SWの刊本

SWのテキストが収録されている刊本を年代を追って紹介する。Mossé (1952) を除いてSWの全テキストが掲載されている。最も古い刊本は、Morris (1868) のEETS (OS 34)、*Old English Homilies and Homiletic Treatises*である。本文はB写本を基にしたdiplomatic textであるが、マージンや注にRT写本との異同が示されている。20世紀初頭にはドイツから2冊

3 平行テキストで使用されている記号は、以下のような役割を持っている。

% 写本では語が結合して書かれているが、別の語として分割する。

— 写本では別の語として離して書かれているが、結合する。

/ 写本で改行している箇所。

\$\$ イニシャル、彩色、太字等の装飾が施されており、特に顕著な文字。

[] 写本ではドットを文字の下に書いたり、ナイフ等で削ったりして削除された文字であることを示す。

P パラフマークを示す。

イタリック体の文字は、写本では省略記号により省略されていた文字であることを示す。

この他に編集に用いた具体的な記号については、注2とOno and Seahill (2011: x-xi) を参照のこと。

の刊本が出版された。一つは、Wagner (1907, 1908)、もう一つがBrandle and Zippel (1917) である。Wagnerの刊本は、もっぱらSWのみを扱っており、R写本に基づいている。1行の間にcaesuraをいれて詩行として整え、韻文の形式で印刷した。もう一方のBrandle and Zippelの刊本⁴は、中英語読本でありテキスト編集の際にもとにした写本はB写本であった。R写本とT写本のvariant readingも収録されている。それに引き続き、イギリスでHall (1920) が*Selections from Early Middle English*に写本を元にしたB写本全文テキストを収めた。HallはSWを韻文扱いにしたWagnerに反論し、頭韻になっていないことから散文であるとした。その後、Wilson (1938) は、もっぱらSWのみを扱っており、B, R, Tの3写本と、SWのソースであったラテン語の*De Anima*とその中英語訳である*The Aeynbiet of Inwit*の対応箇所を2頁見開きで並べた刊本で、詳細な序文、注、グロッサリーもついている。Wilsonのテキストは、3写本ともdiplomatic textとなっている点が、従来の刊本と大きく異なっている。SWは長さが短いのでアンソロジーにも全文を収録できることから人気があり、Hall (1920)、Bennett and Smithers (1968)、Miyabe (1974) のような中英語読本に入っている。これらはB写本に基づいているもののdiplomatic textというわけではなく、本文は編集が施されている。特にBennett and Smithersは注とグロッサリーが充実しており、現在に至るまで読本として最も信頼され、よく好まれている。Diplomatic textとして編集された刊本として重要なのは、次に出版されたd'Ardenne (1977) である。これは、B写本のKatherine Groupすべてのテキストを忠実に転写したもので、写本の読み方だけでなくある程度R写本とT写本との異同についても注で詳述されているため、言語的な研究には重要な刊本である。写本通りに改行されている点も、diplomatic textとして読みやすい。最新の刊本は、Millett and Wogan-Browne (1990) である。3写本の実際の読みについては注を参照すればわかるようになってきているものの、テキストは3写本を比較対照して編者が最も良いものを選んだcritical textとなっており、左頁にテキストを、右頁に対応する現代英語訳を配置している。

以下の刊本の出版状況を表にまとめた。

4 未見のため、Millett (1996) の記述を参考にした。

表1 SWの刊本一覧

Editions	Country	Reader or not	Edited or diplomatic
Morris (1868)	UK	Reader	B写本に基づく edited text、R写本との異同はマージン、T写本は注
Wagner (1907, 1908)	Germany	SW only	R写本に基づく critical text
Brandle & Zippel (1917)	Germany	Reader	B写本に基づく edited text、RTの異同も含む。
Hall (1920)	UK	Reader	B写本に基づく edited text、時々注でRTに言及あり
Wilson (1938)	UK	SW only	3写本の diplomatic text
Mossé (1952)	France	Reader、 抜粋	B写本に基づく edited text、 他写本への言及なし
Bennett & Smithers (1968)	UK	Reader	B写本に基づく edited text、 時々注でRTに言及あり
Miyabe (1974)	Japan	Reader	Edited text
d'Ardenne (1977)	France	KG	B写本に基づく diplomatic text、 時々注でRTに言及あり
Millett & Wogan-Browne (1990)	UK	Reader	critical text、注で3写本との異同に言及

表1を見ると、刊本の編集は1868年MorrisのEETS版を端緒として、20世紀前半から後半まで絶え間なく繰り返されて来たことがわかる。我々の研究では、3写本のオリジナルの写字生が書いたテキストを再現することを目標としている。現在、最新の刊本のMillett and Wogan-Browne (1990)は完全なcritical textであるため、B写本の読みについてはむしろd'Ardenne (1977)

が詳しく、Millett and Wogan-Browne (1990) 以降に出版された Katherine Group のコンコーダンスである Stevenson and Wogan-Browne (2000) も参考になる。なお、このコンコーダンスの編集方針は、B写本の主要な写字生の読みを再現しようとするもので、後の時代の写字生の修正加筆は除外している。

5 B写本の検討結果

Stevenson and Wogan-Browne (2000) は、B写本とコンコーダンス作成のために編集したテキストとの異同は、Introduction の Appendix 2 に一覧表にして明示しており、これによれば、SW では 12 項目の異同があげられている。時折、この一覧表にはあげられていないが、コンコーダンスに引用されている行のテキストから、Stevenson and Wogan-Browne の写本の読み方が窺えることもあり、参考にすることができる。以下にそのリストを再録する (Stevenson and Wogan-Browne 2000: xxi)。

	d'Ardenne (1977)	MS. B
72r08	þis	þis (thorn is capital)
74r01	; þ	· þ
74r20	na liht	naliht
74v20	til	tis
75r03	of oðres	of þe oðres
75v15	tidinges	tidingeS
78r04	him :	him ; ⁵
78r18	feier :	feier ;
78v25	alles	alles
78v25	ledenes	ledeneS
79r10	of eadi	of þe eadi
80v23	[&]	& (this is visible)

5 “;” means a punctus elevatus (˙) in Stevenson and Wogan-Browne (2000).

これらのうち、75v15と78v25の語末の大文字のSについては、我々が編集しているパラレルテキストでは、語末の大文字Sは小文字の場合と区別はしないことにしたので対象外となる。それ以外の項目は、写本のマイクロフィルムやデジタルファイルと照合した結果、実際の写本調査が必要となる80v23を除いては、ほぼStevenson and Wogan-Browneの指摘通りであることを確認した。

d'Ardenne (1977) の転写の修正は、d'Ardenne (1977) の書評のMillett (1979) に6項目、Diensberg (1981) に2項目指摘されている。Stevenson and Wogan-Browne (2000) のリストの中では、74v20、79v10が重複している。

次に、本研究で明らかになったB写本の読みについて幾つか取り上げて述べたい。各項目でフォリオ番号と行番号の次に書かれているのが、写本通りの読みである。

1) 72r24 “husewif :”

“husewif” のあとのコロンは、d'Ardenne (1977) ではinverted semicolonとなっている。Stevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表にも載っていないし、コンコーダンス・テキストでもコロンに修正されていない。

2) 72v20 “vre”

d'Ardenne (1977) では“v”が大文字になっているが、Stevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表にも載っていないし、コンコーダンス・テキストでも大文字である。

3) 74r08 “trowðe”

d'Ardenne (1977) は本文中は“trowð”としているが、脚注では“trowðe”と引用している。Stevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表には載っていないが、コンコーダンス・テキスト中では“trowðe”と修正されている。Millett (1979) でも修正すべき項目としてあげてある。

4) 74r12 “per_toward”

d'Ardenne (1977) は“per toward”としている。語末の“t”の異同についてStevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表にはないものの、コンコーダンス・テキストでは“per_toward”となっている。Millett (1979) でも言及あり。

5) 74v16 “mare .”

d'Ardenne (1977) は “mare” の後の punctus をコンマとしている。Stevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表にないが、コンコーダンス・テキストでは punctus となっている。

6) 75v16 “\$N\$v”

d'Ardenne (1977) の転写では、“N” は書かれていないがマージンにキヤッチワードが示されていることを表している。実際写本では“N”は見えている。これも Stevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表には載っていないが、コンコーダンス・テキスト中では“NV”と修正されている。

7) 76v18 “wurð .”

d'Ardenne (1977) は “wurð ” の後の punctus が無い。Stevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表では言及されていないが、コンコーダンス・テキストでは punctus が加筆されている。Millett (1979) でも言及あり。

8) 77r04 “þurh me ne”

d'Ardenne (1977) は “þurh me ne” の部分が欠落している。Stevenson and Wogan-Browne (2000) の一覧表にないが、コンコーダンス・テキストでは入っている。Millett (1979)、Diensberg (1981) とともに言及あり。

9) 79r14 “wunieð []”

写本では、“wunieð ” の後にシミのような点がある。d'Ardenne (1977) は本文には何も記していないが、注では “trace of erasure of a letter” と説明している。文字の一部であるのか句読点であるのかははっきりしないため、実際の写本調査が必要である。Stevenson and Wogan-Browne (2000) は、一覧表でもコンコーダンス・テキストでもこの点については言及がない。

10) 80r03 “o (f)”

80r と 80v は写本の状態が悪いため、判読しにくいところが多々見られる。d'Ardenne (1977) は それにもかかわらず何らかの文字で転写をしている。ここも “os” と転写しているが、写本のマイクロフィルムやデジタルファイルでは判読が難しいため、実物の写本を調査する必要がある。Stevenson and Wogan-Browne (2000) は、d'Ardenne (1977) と同

じく “os” と読んでいるが、unexpected word (写本の状態や写字生の転写ミス等により判読困難箇所) の印をつけて注意を喚起している。

11) 80v02 “anan_riht”

写本では “anan_riht” の後には句読点は何もないが、d’Ardenne (1977) では punctus が入っている。Stevenson and Wogan-Browne (2000) は d’Ardenne (1977) と同じで、やはり punctus が入っている。

12) 80v05 “wið”

写本では “wið” の後には句読点は何もないように見えるが、d’Ardenne (1977) では punctus が入っている。Stevenson and Wogan-Browne (2000) は d’Ardenne (1977) を踏襲しており、punctus が入っている。なお、d’Ardenne (1977) の注によれば、“wið” の後は “a dot erased” となっている。

以上のように、B写本の読みを d’Ardenne (1977) と Stevenson and Wogan-Browne (2000) の異同一覧表やコンコーダンス・テキストと照合したところ、一覧表には載っていないけれども、コンコーダンス・テキストでは修正済みの項目がかなりあることがわかった。また、Stevenson and Wogan-Browne (2000) でも指摘されていなかった写本の正確な読みもいくつか明らかにすることができた。これらについては、実際の写本との照合を経て、最終確定する予定である。

6 R写本の検討結果

R写本については、先行する刊本は Wilson (1938) となる。本研究で行った R写本の読みを Wilson (1938) と照合したところ、a、f、þ などの文字について大文字か小文字かの判定に体系だった違いが見られた。その他、文字や句読点の読みについて、Wilson (1938) の修正箇所いくつかを紹介する。各項目ごとに B写本のフォリオ番号行番号、それに対応する R写本のフォリオ番号行番号と写本の読みが示され、Wilson (1938) の該当箇所ではどのような扱いになっているか付記してある。

1) 72r22: R 1r23 “gulteð”

Wilson (1938) では “gulted” である。

2) 72v08: R 1v10 “irobbet .”

Wilson (1938) では punctus が抜けている。

- 3) 72v08: R 1v10 “tresur .”

Wilson (1938) では punctus ではなく、punctus elevatus となっている。

- 4) 73r18: R 2r19 “pe”

Wilson (1938) では “e” がイタリック体、すなわち省略されていると見なして転写されている。

- 5) 73v06: R 2v09 “ham .” “com .”

Wilson (1938) では二箇所とも punctus が抜けている。

- 6) 73v08: R 2v11 “god .”

Wilson (1938) では punctus が抜けている。ただし、この点は色が薄いので写本を確認する必要がある。

- 7) 74r06: R 3r08 “warschpe”

Wilson (1938) では “warschipe” である。

- 8) 74r16: R 3v18 “earre & derued”

Wilson (1938) には “&” はない。

- 9) 75r09: R 4r12 “feder ;&”

Wilson (1938) では punctus elevatus ではなくて、punctus となっている。

- 10) 76r12: R 5r17 “feont ;”

Wilson (1938) では punctus elevatus ではなくて、punctus となっている。

- 11) 76r19: R 5v02 “na_ping . heardes”

Wilson (1938) では punctus が抜けている。

- 12) 76r24: R 5v07 “hard . of”

Wilson (1938) では punctus が抜けている。

- 13) 77v07: R 6v17 “wið”

Wilson (1938) は写本通り “wið” と転写しているが、d'Ardenne (1977) の注では R は “mid” と誤って書いている。

- 14) 78r22: R 7v08 “ant”

Wilson (1938) では省略記号が用いられているのに、写本は “ant” としている。

- 15) 80r07: R 9r17 “sunderliche .”

Wilson (1938) では punctus ではなくて、punctus elevatus となっている。

- 16) 80r16: R 9v01 “icwemet”

Wilson (1938) では“icwemet”の後にpunctusがある。

R写本の転写に関して本文の文字の読み方で修正が必要なところは少ないが、句読点に関しては見落としが見られることがわかった。

7 T写本の検討結果

T写本についても、先行する刊本はWilson (1938) となる。R写本の場合と同様に、Wilson (1938) と照合したところ、〈a〉、〈f〉、〈p〉などの文字について大文字か小文字かの判定に体系だった違いが見られた。その他の異同箇所いくつかを以下にまとめた。

1) 72r16: T 105va25 “hinen ?”

Wilson (1938) ではquestion markではなくpuctus elevatusとなっている。

2) 72v24: T106ra18 “feorðe . P”

Wilson (1938) はparaph markを落としている。

3) 73r14: T 106rb11 “hon”

Wilson (1938) は省略されていた文字を“m”とした。

4) 73r18: T 106rb18 “muð :”

Wilson (1938) ではpuctus elevatusではなくて、punctusとなっている。

5) 73r19: T 106rb20 “honden :”

Wilson (1938) ではpuctus elevatusではなくて、punctusとなっている。

6) 73v14: T 106va20 “&”

Wilson (1938) は“&”を“and”と転写している。

7) 73v17: T 106va24 “vn-/mumdlinge”

Wilson (1938) は“vnmunidlinge”と読んでおり、minim lettersの解釈が違っている。

8) 74v14: T 107rb13 “nuten [hwa] ha”

写本では“nuten”と“ha”の間に“hwa”が削除されている。しかし、Wilson (1938) は注で“hw”のみが削除されたとし、本文には挿入していない。

9) 75r20: T 107vb09 “te”

Wilson (1938) では“to”と転写している。すでにd'Ardenne (1977) は注で“to”と読むのは間違いであると指摘している。

10) 76r13: T 108va03 “him ? Godd”

Wilson (1938) では“?”ではなく punctus elevatus としている。

11) 80v09: T 111va22 “ende . P”

Wilson (1938) は paraph mark を落としている。

T写本では、R写本と同様に、いくつかも文字の読み方と句読点の取り違いやパラフマークの欠落などが見られた。過去に出版された刊本では、句読点にはあまり注意を払っていないことが多いが、本研究のパラレルテキストでは、句読点にまで細心の注意を払って編集を行った。

8 まとめ

本研究で最も重要である3写本の diplomatic text がほぼ完成し、パラレルに並べる作業、今までの研究で言及されていなかった新たな写本の読みについて、5、6、7に示したように、いくつかの修正と提案をすることができた。特にRT写本は、数々の刊本編集や写本検証をへているB写本とくらべて、写本の精査が十分であったとは言いがたい。本研究であらたにWilson (1938)の修正箇所が明らかに出来たことは、大いに写本研究に貢献できたと言える。しかしながら、まだ実際に写本を調査しないと判定できない箇所も多々あり、それらの多くは本論には含まれていない。現地での写本調査は今年度実施する予定であるので、その結果をへて最終的な diplomatic text が完成することになる。パラレルテキスト作成はSW研究の新たな研究ツールとなり、それに伴う本文校訂は今まで行われて来たB写本の精読に加えて残りのRT2写本についても正確な写本判読をさらに押し進めるものである。パラレルテキストが完成した後には、Katherine Groupの作品群が書かれているB言語と *Ancrene Wisse* が書かれているA言語、そして13世紀中南部方言の関係について新たな知見を得ることができるであろう。

参考文献目録

*Sawles Warde*の写本のファクシミリ

Ker, N. R. ed. *Facsimile of MS. Bodley 34: St. Katherine, St. Margaret, St. Juliana, Hali Meïðhad, Sawles Warde* (EETS OS 247), London, New York, Toronto: OUP, 1960.

Sawles Warde の刊本 (Reader も含む)

- Bennett, J. A. W. and G. V. Smithers, eds. *Early Middle English Verse and Prose*, Oxford: Clarendon, 1968.
- Brandl, A. O. Zippel eds. *Mätzners Altenglischen Sprachproben: Mit etymologischen Wörterbuch zugleich für Chaucer*. Berlin: Weidmann, 1917.
- d'Ardenne, S. R. T. O, ed. *The Katherine Group: Edited from MS. Bodley 34*. Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de l'Université de Liège 215. Paris: Société d'Édition 'Les Belles Lettres', 1977.
- Hall, Joseph, ed. *Selections from Early Middle English, 1130-1250*. 2 vols. Oxford: Clarendon, 1920.
- Millett, Bella, and Jocelyn Wogan-Browne eds. *Medieval English Prose for Women: From the Katherine Group and Ancrene Wisse*, Oxford: Clarendon, 1990.
- Miyabe, Kikuo, ed. *Middle English Prose Reader* (中英語読本), Tokyo: Kenkyusha, 1974.
- Morris, Richard ed. *Old English Homilies and Homiletic Treatises: (Sawles Warde, and þe Wohunge of Ure Lauerd: Ureisuns of Ure Louerd and of Ure Lefdi, &c.) of the Twelfth and Thirteenth Centuries, Edited from MMS. in the British Museum, Lambeth, and Bodleian Libraries (EETS OS 34)*, London: Trübner, 1868.
- Mossé, Fernand, ed. *A Handbook of Middle English*, Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1952.
- Wagner, Willhelm, ed. *Sawles Warde: Kritische Textausgabe auf Grund aller Handschriften mit Einleitung, Anmerkungen und Glossar*. Bonn: Hanstein, 1908 [based on Diss. U Bonn, 1907].
- Wilson, R. M., ed. *Sawles Warde: An Early Middle English Homily Edited from the Bodley, Royal and Cotton MSS*. Leeds School of English Language Texts and Monograph 3. Kendal: Wilson, 1938.

Sawles Warde のコンコーダンス

Stevenson, Loran and Jocelyn Wogan-Browne eds. *Concordance to the*

田辺春美 *Sawles Warde*の異写本パラレルテキスト研究：中間報告

Katherine Group and the Wooing Group, Cambridge: D. S. Brewer, 2000.

*Sawles Warde*の現代英語訳

Savage, Ann and Nicholas Watson, trans. *Anchoritic Spirituality: Ancrene Wisse and Associated Works*, The Classics of Western Spirituality. New York: Paulist, 1991.

その他

狩野 晃一 “The *Sawles Warde*: A Three-Manuscript Diplomatic Parallel Text, Trial Version” 『駒澤大學外国語部論集』 64, 269-350, 2006.

Diensberg, Bernhard, Review of *The Katherine Group: Edited from MS. Bodley 34*. Edited by S. R. T. O d’Ardenne, (Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de l’Université de Liège 215), Paris: Société d’Édition ‘Les Belles Lettres’, 1977, pp. xii+185. *Anglia*, 99, 1981: 226-9.

HyperBibliography of Middle English, in *Middle English Compendium*, The University of Michigan, <<http://quod.lib.edu/h/hyperbib/>>.

Kubouchi, Tadao and Keiko Ikegami with John Scahill, Shoko Ono, Harumi Tanabe, Yoshiko Ota, Ayako Kobayashi, Koichi Nakamura, eds. *The Ancrene Wisse: A Four-Manuscript Parallel Text Preface and Parts 1-4*, Studies in English Medieval Language and Literature 7, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2003.

Kubouchi, Tadao and Keiko Ikegami with John Scahill, Shoko Ono, Harumi Tanabe, Yoshiko Ota, Ayako Kobayashi, Koichi Nakamura, eds. *The Ancrene Wisse: A Four-Manuscript Parallel Text Parts 5-8 with Wordlists*, Studies in English Medieval Language and Literature 11, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2005.

Millett, Bella, Review of *The Katherine Group: Edited from MS. Bodley 34*. Edited by S. R. T. O d’Ardenne, pp. xii+186 (Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de l’Université de Liège 215), Paris: Société d’Édition ‘Les Belles Lettres’, 1977. *Review of English Studies*, NS 30, 1979: 333-4.

Millett, Bella, ed. *Annotated Bibliographies of Old and Middle English Literature, II. Ancrene Wisse, the Katherine Group and the Wooing Group*, Cambridge: D. S. Brewer, 1996.

中野 好 「*Sawles Warde* 写本の比較と校合」『岩手医科大学教養部研究年報』33, 65-98, 1998.

Ono, Shoko and John Scahill with Keiko Ikegami, Tadao Kubouchi, Harumi Tanabe, Koichi Nakamura, Satoko Shimazaki, Koichi Kano eds. *The Katherine Group: A Three-Manuscript Parallel Text, Seinte Katerine, Seinte Marherete, Seinte, Iuliene, and Hali Meidhad with Wordlist*, Studies in English Medieval Language and Literature 32, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2011.

Tolkien, J. R. R., “*Ancrene Wisse* and *Hali Meidhad*”, *Essays and Studies* 14, 1929: 104-26.